広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	谷崎潤一郎「小さな王国」論 : なぜ沼倉は「太閤秀吉」となり得たのか
Author(s)	佐藤, 魁人
Citation	近代文学試論 , 57 : 1 - 11
Issue Date	2019-12-25
DOI	
Self DOI	10.15027/50486
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050486
Right	
Relation	

谷崎潤一郎「小さな王国」論

―なぜ沼倉は「太閤秀吉」となり得たのか―

佐藤魁人

はじめに

「小さな王国」は大正七年、雑誌『中外』八月号に発表された作品である。これまで先行研究ではそのほとんどにおいて、小学校教師貝島の教師像や、沼倉が作った「沼倉共和国」の経済機構について分析が行われてきた。またその方法として同時代的な社会状況を踏まえてテクストを分析する手法が頻繁に採用されてきた。先行研究がそのような傾向にある一つの原因として、吉野作造の記述が挙げられる。(1)

作者の覘ひ所は何れにあるにせよ、我々は之によつて現代人が何となく共産主義的空想に耽つて一種の快感を覚ゆるの事実を看過する事は出来ない。而して少しく深く世相を透観する者にとつて、今や社会主義とか共産主義とかいふ事は、理論ではない、一個の厳然たる事実である。

「小さな王国」発表前年のロシア革命成立を受ける形で書かれた文章である。作品の中に同時代的な共産主義への意識を見出すこの論によって、その後の「小さな王国」研究では共産主義的な側面に注目が置かれ、同時代の政治・経済状況等、実社会との関わりが念頭に置かれてきた。本作品に谷崎による社会批判を見出す読みとして伊藤整のものが挙げられる。(2)

簡単に言えば、この作品は少年の世界に形を借りたところの、統制経済の方法が人間を支配する物語りである。現代社会は必然的に統制経済の社会へと推移しつつある。その統制経済社会で、ある権力のもとに発行される紙幣が、即ち経済上の約束が、人間の生活意識を変え、人間の価値判断を狂わせるという物語りである。谷崎潤一郎の全作品の中で最も特色のある現代社会の批判性を備えた作品と見ることが出来る。

伊藤は「谷崎潤一郎の全作品の中で最も特色のある現代社会の批判性を備えた作品」と評しつつも、同じ解説の中で「図式的諷刺性」は谷崎には「縁のないもの」であると述べ、谷崎自身が社会風刺の意味合いを意図的に作品内部へ組み込んだ可能性の低さを指摘した。以降、谷崎が社会風刺を意識していたかどうかはそれほど言及されなくなったが、テクスト自体が同時代状況への批判性を備えているという共通認識を

根底に置きながら研究が重ねられたといってよいだろう。

稿者もこの前提を踏まえ、改めてテクストの細部に注目することで、沼倉はなぜ「沼倉共和国」を建設するほどにクラスを支配し得たのか、この点についてこれまでの研究では述べられてこなかった沼倉の戦略を明らかにしていきたい。そのために沼倉と貝島の力関係が大きく揺らぐきっかけとなった修身の授業の場面に焦点を当て考察を進めていく。そうすることで「小さな王国」の孕む問題意識をより明確にとらえることができると考えるからである。

一、沼倉の戦略

テクストは小学校教師である貝島昌吉がG県M市の小学校へ赴任したという情報からスタートする。親の反対を押し切り「お茶の水の尋常師範学校」へ入り、卒業後東京で小学校教師になった貝島は、「日本支那の東洋史を研究して、行く末は文学博士にな」るという野望を抱きつつも、父の死や結婚を経て、立身出世の道を諦めた人物として設定されている。彼は東京での生活に困窮し、家族を連れて移転をした。移転後の生活はしばらく伸び伸びと充実しており、教師生活も順調に進んでいたようである。以下の本文引用からはその充実ぶりや教師としての貝島の特性が伺える。

しかし性来子供が好きで、二十年近くも彼らの面倒を見て来た貝島は、いろ〳〵の性癖を持つた少年の一人々々に興味を覚えて、誰彼の区別なく、平等に親切に世話を焼いた。場合に依れば随分厳しい体罰を与へたり、大声で叱り飛ばしたりする事もあつたが、長い間の経験で児童の心理を呑み込んで居る為に、生徒たちにも、教員仲間や父兄の方面にも、彼の評判は悪くなかつた。正直で篤実で、老練な先生だと云ふ事になつて居た。

どの生徒に対しても分け隔てなく接し、様々な方面からの信頼を得ていたことがよく分かる。

そんな順風満帆な教師生活が次第に崩壊していくのだが、そのきっかけは言うまでもなく沼倉庄吉の転校である。沼倉は貝島がG県M市の小学校へ赴任した年に受け持った尋常三年級が五年級に進んだ年の春に転校してきた。彼の特徴は以下のようである。

顔の四角な、色の黒い、恐ろしく大きな巾着頭のところ〴〵に白雲の出来て居る、憂鬱な眼つきをした、づんぐりと肩の円い太つた少年で、名前を沼倉庄吉と云つた。何でも近頃M市の一廓に建てられた製糸工場へ、東京から流れ込んで来たらしい職工の忰で、裕福な家の子でない事は、卑しい顔立ちや垢じみた服装に拠つても明かであつた。

「東京から流れ込んで来たらしい職工の忰で、裕福な家の子でない」という点は非常に重要であるが、どのように重要になるのかは後述する。

転校してきた沼倉はあっという間にクラスの中心人物へと成り上がる。入学してまだ十日にもならないうちに、戦争ごっこで沼倉組を組織

し、繰り返し勝利を収めるほどの勢力を誇っていた。そしてある日の修身の時間、遂に貝島と沼倉の関係を大きく揺るがす出来事が起こる。ここで、そもそも作品発表当時の小学校における修身の時間とはどのようなものであったのかを確認しておく。出木良輔「谷崎潤一郎「小さな王国」論――「新教育」をめぐって――」には次のように書かれている。(3)

修身とは戦後以降言うところの「道徳」の時間にあたり、説話・伝記などの読み物を通した徳育教育が行われた。明治四〇年の小学校令改正による国定教科書の修正に伴って明治四三年から使用され始めた第二期国定教科書は国家主義に大きく傾斜していたことで知られているが、この際に国民教育の要として捉えられていたのが修身という科目でもあった。

また小澤祥司「修身教育における二宮金次郎像普及の意図と「特別の教科　道徳」」でも修身の時間が国策に寄与していたことが指摘される。(4)

小学校で教える「修身」は、教育勅語の趣旨に基づいて児童を教え導き、天皇や皇室への忠誠と敬愛、愛国心を身につけ、国に対する臣民の責務を理解・体得させるための科目として位置づけられたのである。以後、修身は学校で教えるすべての教科の前に置かれ、修身こそが教育の根本とされた。いわば修身は、教育勅語という鋳型に児童たちをはめ込む役割をもっていた。

以上二つの論考から、明治末期より、修身の時間は国家主義を推し進めるための「政策」的役割を担っており、国を愛する次なる国民の育成を目的としていたことが窺える。また小澤は同論文において、教育勅語に記された徳目を守る理想的な臣民モデルとして二宮金次郎が修身の教科書にしばしば取り上げられていたと述べる。このことをテクストに当てはめると、貝島は当時の典型的な国家主義を称揚する修身の授業づくりをしていたことになる。

そのような背景を持って厳格な雰囲気で修身の授業が進む中、沼倉が無駄話を始めるのである。

「誰だ先からべちや〳〵としやべつて居るのは？　誰だ？」
と、とう〳〵彼は我慢がし切れなくなつて、かう云ひながら籐の鞭でびしツと机の板を叩いた。
「沼倉！　お前だらう先からしやべつて居たのは？　え？　お前だらう？」
「いゝえ、僕ではありません。……」
沼倉は臆する色もなく立ち上つて、かう答へながらずつと自分の周囲を見廻した後、
「先から話をして居たのは此の人です」
といきなり自分の左隣に腰かけて居る野田と云ふ少年を指さした。
（中略）
野田は沼倉に指さゝれた瞬間、はつと驚いたやうな眼瞬きをして、憐れみを乞ふが如くに相手の眼の色を恐る〳〵窺つて居たが、やがて何事かを決心したやうに、真青な顔をして立ち上ると、

「先生沼倉さんではありません。僕が話をして居たのです」
と声をふるはせて云つた。

沼倉に罪を擦り付けられた野田はなぜか沼倉を庇い始め、その後一人また一人と沼倉を味方するクラスメイトが現れ、遂にはクラスの生徒全員が沼倉を守ろうとした。結果として貝島は沼倉への懲罰をやめてしまうのである。

この場面について小仲信孝は以下のような考察をしている。[5]

彼の恐ろしさは修身の時間を狙い撃ちしていることを、まず指摘しなければならない。普段は生徒にやさしく、「慈愛に富んだ態度」で接している貝島が、「修身の時間に限つて特別に厳格にする」ということを知っていて、つまり貝島にとって修身の時間がある神聖さを伴う時空であることを承知の上で、いわばその神聖さを逆手にとって、大胆にも部下たちの忠誠度を測る首実験を敢行していたのである。

貝島が教師としてある種の神聖さ・権威を最も発揮する修身という時間。そのタイミングをあえて選ぶという戦略を沼倉がとった、という考察である。先ほど確認した同時代的な修身の時間の情報を入れ込むと、貝島の厳格さの背後には、国家の流れに見事貢献しているという自負が潜んでいるだろう。そんな修身の時間を選ぶというところには確かに戦略があると考えられ、「あえて」選んだと考えられる。

他の先行研究でもこの場面に関する考察はなされているが、沼倉が自身の統率力を試すための機会として用いたという指摘や、[6] 子どもたちの信望を集めるための行為だという言及に[7]留まっている。

なぜ修身の時間を選んだのかという問いに対する答えとしてはいささか不十分ではないだろうか。

確かに小仲の指摘する通り、沼倉はクラスメイトの忠誠を試したと考えられる。事件が発生した修身の時間よりも前に、既に沼倉がクラスを支配していたことは明らかである。このことは貝島の息子でクラスの一員でもある啓太郎の弁解から窺える。

すると啓太郎は下のやうな弁解をした。――あれは成る程悪い行ひには違いない。けれども沼倉は格別人を陥れようなどゝ云ふ深い企みがあつたのではなく、実は自分の部下の者（即ち全体の生徒）が、どれほど自分に心服して居るか、どれ程自分に忠実であるかを試験する為めに、わざとあんな真似をやつたのである。

この啓太郎の弁解の中に「部下」という言葉が使われている。これは沼倉がクラスの全員との間に上下関係を構築していることの何よりの証拠である。修身の時間の際には既に沼倉がクラスのトップに君臨していたことを考えると、修身の時間の「試験」とは「忠実であるかどうか」という忠誠心の有無を確かめる行為ではなく「どれ程自分に忠実であるか」という忠誠心があることを前提として、その度合いを確かめるためのいわば最終試験だったのである。この沼倉の試験について小林幸夫が生徒たちの視線に着目し、興味深い指摘をしている。[8]

さて、この沼倉の〈仕掛け〉に関しては、眼＝視線が重要な働きをしていることに注目しないわけにはゆかない。沼倉が野田を指さす前に「ずつと自分の周囲を見回した」り、指差された野田が「憐れみを乞ふが如くに相手の眼の色を恐る〳〵窺つて居た」り、野田が思いつめて「先生、……」と声を発すると沼倉が「横目を使つて、素早く野田に一瞥をくれた」りしているように、視線が行動と深くかかわっている。（中略）野田が自分に投げ掛けられた目の意図をできるだけその眼に沿う形で読みとろうと「恐る〳〵窺つて居」ということは、沼倉の視線が支配の視線であり、政治的な力を伝達せんとする視線であることを示している。

小林の指摘に基づいてテクストを改めて見ると、沼倉はまず貝島から無駄話を指摘され立ち上がった際、周囲を見回す。これは自分の過失を誰になすり付けるか、その吟味をしていると考えられる。そこで「温厚な品行の正しい」野田を選んだことにも意図がある。野田は「温厚」であるがゆえに沼倉の視線の圧力に応じるしかない。加えて「品行が正しい」クラスメイトが沼倉の誤った行為を庇うことで、この「庇う」という行為にも「正統性」が多少付与されることとなる。つまり沼倉はまず間違いなく自分を庇い始めるであろう野田を一番目の標的として打算的に選んだのである。そこには確かな勝算があったことが伺える。つまり沼倉は計画的に最終試験を執り行ったのである。

野田に続いて次々と他の生徒も立ち上がるのだが、この順番にも注目すべきである。野田の次に立ち上がったのは「いたづら小僧の西村」である。西村は「平生腕白らしい、鼻つたらしのやんちやんらしい表情」をしているのだが、この時は「十一二の子供とは思はれないほど真面目くさつた、主君の為めに身命を投げ出した家来のやうな、犯し難い勇気と覚悟とが閃い」た表情に変わっている。この西村の驚くべき変化は貝島に衝撃を与えたであろう。それに続くように次に立ち上がったのは級長を勤める秀才の中村である。これに対しては語り手も「驚いた事には」とその意外性を強調している。級長を勤めておりかつ秀才であるという中村の性質を鑑みると、貝島にとってクラスの中で一番モラルを持った生徒と見なされていたのではないだろうか。その中村までもが沼倉を庇う異常事態は貝島に更なる衝撃を与えたことだろう。このあとクラスメイトのほとんどが立ち上がることになるのだが、名前が出されているのは野田、西村、中村の三人のみである。彼らはそれぞれ「野田＝温厚」、「西村＝やんちゃ」、「中村＝秀才」と、異なる特徴的な性質を貝島に認められている生徒である。この三人はクラスの核となる人物と言ってもいいのではないだろうか。野田以降のこの流れが沼倉の戦略であったのかどうかは分からない。だが少なくともこの順番で庇うという流れが沼倉にとって最も効果的な反逆の形になっていることは間違いないことであろう。

ここで、修身の時間に起きた事件について、沼倉以外の他の生徒の立場で考えてみると、更なる意味づけを行うことができるのではないだろうか。名前のあがっていないその他大勢のクラスメイトにとって、野田、西村、中村がこの順番で沼倉を庇う様子は、沼倉を庇うことの正当性を感じさせずにはいられない。まず温厚な野田が立ち上がることによって、一定数の生徒が沼倉側に立とうと決意することが予想される。「あの温厚な野田が庇うのだから」という心理が働いてもおかしくな

いだろう。しかしこの段階では、野田は温厚だからこそ沼倉に逆らえないのだという捉え方もできる。この捉え方を崩すのが次立ち上がる西村の存在である。やんちゃな西村であれば、沼倉に逆らうこともできそうなものであるが、その西村が真面目な表情で立ち上がった。このことは、無理やり従わされているという見方を消去させる効果を持っているだろう。だがしかし西村の行動を見てもなおそれが本当に正しく冷静な判断なのかという疑問が残る。「腕白な西村だから状況を見誤ってしまっているのではないか」と思ってしまう生徒もいるだろう。この疑問を拭い去るのが秀才中村の存在である。級長を勤めている秀才中村までもが沼倉を庇うことで、沼倉の味方をすることの正当性が担保され、教師側ではなく、沼倉側に立つことが本当に正しいのだという気持ちがその他のクラスメイト達の中に芽生えるのである。その他大勢の生徒たちの目の前で、沼倉側に立つことの正しさがきれいな形で証明されていく。沼倉が事前にクラスメイトのほとんどを支配下に置いており、そのクラスメイトたちは修身の時間に決断を迫られたわけではないという読みも存在しうるだろうが、野田、西村、中村という順番で立ち上がることによって、少なくとも教師の貝島がその流れに圧倒され、クラスの雰囲気が沼倉を支持する方向へ流れていく様を見たことは間違いないであろう。

以上述べてきたような流れで全員の生徒が勇気をもって沼倉を庇った。その結果、貝島はついに懲罰を止めてしまう。これが意味することは何か。それは教師の力の無さである。多方面から信頼を置かれている貝島という教師による修身の授業、それは子どもたちにとって最も教師の権威を強く目の当たりにする場である。本来そこでの力関係を崩壊させようなどという考えは思いつきもしないであろう。しかし沼倉という一人のリーダーの牽引によって、沼倉以外の四十九名は、子どもである自分たちの力で権力の象徴ともいえる教師の最も権威的で神聖な瞬間を打ち崩すことに成功したのである。その達成感と、貝島への信頼の失墜は言うまでもないだろう。彼らは自分たちの力で大人に抗うことが可能であるということを認識し、教師を相対的に見つめる目を備えたのである。繰り返しになるが、どこまで沼倉が戦略的に考えていたかを明らかにすることは出来ないが、修身の時間を選んだことは、生徒たちの価値観の転換までをも引き起こす絶大な効力を発生させたのである。

そして更にこのことは沼倉への忠誠心を補強する効果をも持つ。教師の権威を打ち崩すという成功へと自分たちを導いた沼倉への尊敬のまなざしが生まれるのである。それまではクラスメイト五十名の中での戯れでしかなかったものが、初めてその小さな共同体の外側に対する力学を発揮したことによって、沼倉を頂点とする共同体の結束は強固なものへと成長を遂げ、その後の「沼倉共和国」建設への足掛かりとなるのである。

だがここで一つ疑問が浮かび上がる。なぜ沼倉は修身の時間にあのような行為に至ることが出来たのであろうか。次にこの疑問を追究していく。

二、貝島と沼倉の共通項

沼倉はなぜ修身の時間において真っ向から貝島に反発するような真

似ができたのだろうか。

一つに沼倉のそもそもの性質が関係していると考えられる。沼倉は普段から「己は太閤秀吉になるんだ」と言っている。太閤秀吉とは言わずと知れた豊臣秀吉の事であるが、日本で初めて天下統一を成し遂げた人物として広く知られている。つまり沼倉はそもそも人の上に立つこと、統率者となることを夢見ている子どもであることが分かる。そして沼倉にとっての天下とはクラスであり、彼の特異性として、その天下の中に教師までも含まれていたことが挙げられる。クラスメイトを支配下に置くことだけでなく、教師をも自己の勢力図の中に組み込む視点は、沼倉の特徴だと言える。修身の授業後の啓太郎による弁解にはそのことを示唆するような言及がなされている。

あの日あの事件の結果として、沼倉は、級中の総べての少年が一人残らず彼の為めに甘んじて犠牲にならうとしたこと、さうしてさすがの先生も手の出しやうがなかつた事を、十分にたしかめ得たのである。

沼倉はクラスメイトの忠実さだけでなく、貝島が手を出せないことも確認したという。修身の時間に臨む時すでに教師貝島の対応までも試していたという可能性が浮上する。少なくとも、その事件を経て沼倉の天下に貝島も入ってしまったということは言えるだろう。自身の力を及ぼし得る対象として、さらに言えば支配可能な対象として貝島を捉えはじめている。

しかしこれだけでは沼倉の行為を必然的なものとして捉えることは難しい。そこで注目したい点がある。沼倉が転校してきた経緯である。本文に書かれている沼倉の特徴を先に抜粋したが、そこでは「東京から流れ込んで来たらしい職工の忰で、裕福な家の子でない」と書かれていた。東京からG県M市へ流れ込んでくるという経緯は明らかに貝島の移転の経緯と重なる。つまり沼倉の家庭も東京での生活に困窮して移動してきた可能性が高い。このことを踏まえたとき、他の生徒とは違う視点を沼倉が得る可能性が浮上する。貝島を教師として見る視点ではなく、貧困が原因で引っ越した一家の家長として見る視点である。貝島と同じく東京から流れ込んで来たこと、クラスに貝島の息子啓太郎がいることから、沼倉が貝島の家庭の状況を大まかに把握している可能性は少なからずある。貝島が沼倉をその見た目から裕福でないと判断したように、啓太郎を見てそう判断することも可能なはずである。テクストにもそのことを匂わせるような記述がある。貝島が息子の啓太郎から「沼倉共和国」の実態について聞き出した箇所において、以下のように書かれている。

啓太郎は先生の息子だからと云うので、沼倉から特別の庇護を受けて居る為めに、お札は常に不自由しなかつた。――多分沼倉は、貝島の家庭の様子を知って居て、啓太郎の窮乏を救ってやらうと云ふ義侠心もあつたらしい。

これは修身の時間よりも後の沼倉に関する記述なので、修身の時間に沼倉が貝島の困窮する家庭状況を把握していたかまでは定かでないが、沼倉が教師としての貝島ではない貝島の側面に着目できていた可

能性は高い。

学校という媒介を通した教師としての貝島だけではなく、学校を介さない、家長としての「生」の貝島を見るまなざしを沼倉は持っていたのではないだろうか。そうすると、子どもたちにとっての権威の象徴といえる教師像が沼倉の中で崩れ始め、統制可能な射程範囲に貝島は入り込んでしまうのである。つまり他のクラスメイトと異なり、沼倉は事件が起きた修身の授業の際、既に教師貝島を絶対的な権力としてではなく、貧困に苛まれる弱い一人の大人として相対的に見る目を備えていたとも考えられるのである。小林は貝島と沼倉の名前が同じ「しやうきち」であるという共通項に着目して、貝島の名前に込められた皮肉を指摘したが、[9] 東京から流れ込んできた人物であるという共通項からも、貝島と沼倉の権力関係が転倒するその必然性を見出すことが出来るのである。

以上、沼倉の性質と、貝島・沼倉の移住という共通項を根拠として、なぜ沼倉は修身の授業で貝島に逆らう行為を遂行することが出来たのかという疑問についての考察を行った。

三、同時代言説の中の「小さな王国」

最後にここまでを踏まえ、テクストがどのような問題意識を内包しているのか考えていく。

先述したように、本作品は当時の社会状況との関わりから考察されることが非常に多い。本発表ではここまでテクストそのものから修身の時間について分析し、沼倉が修身の時間を選んで貝島から学級の覇権を奪ったその内実を把握した。ここで二つの先行研究に依拠しながら、「小さな王国」発表当時の同時代的な背景を確認し、テクストとの接続を試みる。

第一に確認したいのは、当時の社会状況の中で小学校教師はどのような職業と捉えられていたのかということである。この点に関しては日高佳紀が「〈改造〉時代の学級王国――谷崎潤一郎『小さな王国』論――」の中で細かい調査と考察を行っている。[10] 日高の論は明治三、四十年代に起きた師範学校の社会的位置の変化を強調する。明治前半期まで師範学校卒業生は教員養成機関というよりも高等普通教育機関としての側面が強く、師範学校への進学は「立身出世」を叶えるルートとして存在していた。しかし明治三十年代に入り、教育に関する様々な法令が出される中で、師範学校は高等小学校とのつながりを強め、学校体系の中に組み込まれてしまったのだという。結果として、師範学校の社会的位置は中等レベルの教育機関へとその地位を著しく下げた。小学校教員はさらに不幸に見舞われる。それが第一次世界大戦下のインフレである。この当時のインフレが物価の高騰を招き人々の生活を圧迫したことはよく知られているが、小学校教師もこの時代の煽りを受け、困窮を極めていた。つまり明治末期から教員の社会的地位は著しく低下したと捉えられる。以上が日高の論文の簡単な要約である。また、テクストの舞台を作品発表の大正七年に設定すると、貝島はこの時代の煽りを直接的に受けることになっていると日高は考察する。

このように同時代状況とテクストを結び付けると、貝島の悲劇が決して偶然でなかったことが浮き彫りになる。大戦時のインフレにより移住を余儀なくされたことは、もちろん必然的に発生した事態である。

それから日本橋区のS小学校、赤坂区のT小学校と市内の各所へ転勤して教鞭を執つて居た十五年の間に、彼の地位も追ひ〳〵に高まつて、月俸四十五円の訓導と云ふところまで漕ぎつけた。が、彼の収入よりも、彼の一家の生活費の方が遥かに急激な速力を以て増加する為めに、年々彼の貧窮の度合いは甚しくなる一方であつた。

同時代状況を踏まえると、ここでいう「生活費」が「急激な速力」で増える原因は第一次世界大戦にあると見てよい。インフレによる物価の高騰は、たくさんの家族を抱える貝島にとって死活問題となるほどの多大なる影響を与えたと推測できる。特に日本の経済活動の中心地である東京となると、インフレは最大級の力でもって家庭を圧迫するだろう。テクストからも読み取ることはできるが、同時代の社会状況を前提として読むと、貝島の差し迫った状況はより鮮明に読者の前に立ち現れる。

加えて、職工の忰である沼倉によって権力関係を転倒させられたことも、偶然とは言い切れない事情を包含しているように見えてくる。社会全体の認識として教員、特に小学校教員の地位は落ち込み、聖職であるかのように見なされていたところのものが、他の商売や職工と変わらない一つの単なる職業として改めて位置づけられる。前述したように沼倉は貝島を自身の天下の範囲内で捉える相対的な視点を有している稀有な存在と言えるが、そのことに付け加えて、沼倉の相対的視点は、ただ沼倉個人の性質や経験に起因するものではなく、社会全体の空気を反映した態度と見ることが出来るようになるのだ。

次に当時の小学校教育の事情について言及している出木良輔「谷崎潤一郎「小さな王国」論――「新教育」をめぐって――」を参照する。[11] 出木は明治後半期から大正期にかけて日本における教育スタイルが揺らぎ始めたことに着目する。

また大正期には、一九一〇～二〇年代にかけてのデモクラシーを背景に、それまでの画一的で型にはめたような教育スタイルを廃して、「児童本位（中心）主義」を謳う「新教育」が行われ始めたことや、それまでの教師中心・知識注入主義の教育、すなわち「旧教育」に批判的な教育論が数多く提出されたことなどもよく知られている。

ここで出木が述べているように、当時新しい教育思想として「児童本位主義」が取り沙汰されたが、「小さな王国」の貝島はかなりこの潮流を自身の教育思想の中に組み込んでいると考えられる。貝島は普段「極く打ち解けた、慈愛に富んだ態度を示して、やさしい声で生徒に話しかける」ような教師であり、修身の時間のみは厳格になるとは言うものの、一方的に教師の権力を振りかざすような「旧教育」の姿とはかけ離れた人物であることが分かる。修身の時間の事件以降、貝島は沼倉の力をあえて利用し、彼をリーダーに任命することで学級をまとめようという、まさに「児童本位主義」的な手法を用いる。この場面からも貝島の時代の一つの波に乗った教育思想が伺える。そのため、「小さな王国」は明治末期から大正期にかけての教育の流れを汲んだ作品であると言える。

だが、これだけでは説明不足ではないだろうか。なぜならその「児童本位主義」を取り入れた貝島の教育は明らかな失敗を迎えるからである。沼倉に学級を取りまとめる役目を与えた結果、「沼倉共和国」が成

立し、独自の貨幣が横行するような事態にまで至った。貝島の受け持つ学級は「沼倉を始め一同が先生を馬鹿にし出して、わざと癇癪を起させるやうな、意地の悪い真似ばかり」し、現代でいういわゆる学級崩壊のような状況に陥ってしまった。ここから、テクストの孕む問題意識が見えてくる。「児童本位主義」の限界である。確かに「児童本位主義」は児童を中心とする教育を行うという点で非常に聞こえがよい。しかしそれは「旧教育」と比較したとき、それまでふりかざしていた教師の権威を剥ぎ取ることへとつながり、一歩間違えれば生徒が好き勝手し放題になってしまう学級を産み出すような危険性を抱えている。そのような最たる例を「小さな王国」のテクストは先見的に描き出していたのである。

何度も繰り返すが谷崎自身が同時代状況を踏まえ、それらに対する明確な批判意識をもって本作品を執筆したかどうかは疑わしい。しかし、「小さな王国」のテクストそれ自体には、明らかに当時の社会的な教師の立場や、教育の潮流が立ち現れており、同時代的な社会状況に対する批判性が孕まれているのである。

おわりに

本稿では「小さな王国」テクストの中でも修身の時間に焦点を当てて分析を行い、なぜ沼倉が貝島に反発するような行為をとることができたのか、またなぜそれが成功を収めたのかを考察した。

修身の時間の流れを改めて確認していくことで、貝島が追いつめられていく流れが、偶然とは考えにくいほどスムーズであることが確認できた。沼倉が戦略的に事前の計画を組み立てていたのかどうかは判然としないところがある。しかし、野田、西村、中村というクラスを代表するような三人が真っ先に沼倉を庇ったことを鑑みると、それを偶然の一言で片づけられるのだろうか。

また、沼倉が教師貝島に対して反抗的な態度を取ることができる理由はその特異な性格に依拠するところが大きい。ただ沼倉が貝島と似た流れで移住してきたことを踏まえると、必ずしも沼倉の先天的な性格だけに終始しない二人の相似関係を垣間見ることができるだろう。

大正期に発表された谷崎作品の中でも、その特異性からか「小さな王国」は比較的論じられることが多い。これまでも同時代的な教育・経済の観点から研究が進められてきたが、今一度テクストそのものに立ち返って読解を試みる取り組みをしたということが本稿の特徴の一つであろう。

加えて、作品発表当時の時代状況を詳しく調査した日高、出木両氏の論に依拠しながら、児童本位主義の果てを描くテクストの先見性について論じた。

一方で、本稿では貝島が沼倉共和国に取り込まれていく物語後半から結末にかけての内容を論じることができなかった。修身の時間に起きた現象をつぶさに見ていく今回の取り組みを踏まえて結末部の検討も進めていきたい。この点は今後の課題とする。

注

（1）吉野作造「時論――我国現代の社会問題――」（『中央公論』大七・一

（2）伊藤整「解説」（『谷崎潤一郎全集 第六巻』、中央公論社、昭三三・六）

（3）出木良輔「谷崎潤一郎「小さな王国」論――「新教育」をめぐって――」（『国文学攷』二二九、広島大学国語国文学会、平二五・九）

（4）小澤祥司「修身教育における二宮金次郎像普及の意図と「特別の教科 道徳」」（『日本児童文学』第六五巻、令元・八）

（5）小仲信孝「欲望する子どもたち――「小さな王国」論――」（『跡見学園女子大学短期大学部紀要』三二、平八・二）

（6）生方智子「谷崎潤一郎『小さな王国』における共同体と権力」（『文芸研究』一二五、平二七・二）において修身の授業の場面は「沼倉にとって教室における彼の統制力を確認した出来事となった。」と考察されている。

（7）関礼子「教室空間の政治学――『一房の葡萄』・『小さな王国』を中心に――」（『日本文学』四六（一）、平九・一）では「彼らにとってこの朝の教室は、どうにもならない耐え難いものに思われたのだ。その空気をいち早く察したのが、転校生の沼倉庄吉である。彼は新参者であるがゆえに、この場の空気の重苦しさを、そしてそれを撥ね除けたいという生徒たちの無意識を誰よりも敏感に感じたのであろう。あるいは目ざとい彼は、この教室での反乱がこどもたちの信望を集める好機であることを知っていたのかもしれない。」と述べられている。修身の時間を「耐え難いもの」であると見なす視点は他の論者の提出していない、関独自のものだと言える。

（8）小林幸夫『『小さな王国』論――二人の〈しやうきち〉――」（『作新学院女子短期大学紀要』一〇、昭六一・一二）

（9）注（6）に同じ。

（10）日高佳紀「〈改造〉時代の学級王国――谷崎潤一郎『小さな王国』論――」（『日本近代文学』五九、平一〇・一〇）

（11）注（3）に前掲。

付記 本文引用に際しては『谷崎潤一郎全集』第六巻（中央公論新社、平二七・一二）を使用した。また引用の際適宜旧字を新字に改めた。

（さとう かいと、広島大学大学院博士課程前期在学）